

在日台湾人作家温又柔『空港時光』研究： 「内なる外地」と自他表象の連動

謝 惠貞¹⁾

Abstracts

Although Yuju Wen's "Airport Time" is said to be a "moving literature" that uses the airport as the stage to loosen the boundary between "subject" and "the other", it undermines the mechanism by which the literature is regulated by national literature, allowing the immigrants in the work and the "otherness" of the work itself to be equalized (as opposed to classed). This is manifested in the promotion of mutual understanding between "nationals" and "immigrants", interpreting the possibilities of interchangeable lives between the characters, weakening the authority of "national literature" and creating a "third space" that visualizes the "other".

In addition, Wen opens up the possibility of a "Furigana" that is open to foreign languages, and uses the language of the mover to weave a heteroglossia text with a combination of shapes, sounds and meanings. She describes her dual linguistic and cultural identity as a privilege, as if it were the advantage of holding a plural passport, which she puts to use in the mechanism that allows self representation and other representation to communicate with each other. As such, the work has a minority literary "collective assemblages of enunciation", which in turn gives rise to "inter-subjectivity."

キーワード：移動文学、内なる外地、他者性、振り仮名、自・他表象

Key Words : moving literature, inner Gaichi, otherness, Furigana, Self-Other representation

1. はじめに「移民文学」から「移動文学」へ

近年、『海の彼方』や『無国籍：私の祖国はどこか』などのドキュメンタリー映画では、歴史に翻弄され、屈折に満ちた台湾人の境遇が相次いで取り上げられている。グローバル化の進展に伴うディアスポラにより、それを彷彿させる新しい世代の台湾人日本語作家も注目されるようになった。2009年に「好去好来歌」(『すばる』, 2009.11。後に『來福の家』に収録。集英社, 2011)により、すばる文学賞佳作を得て、2017年には『真ん中の子どもたち』(以下は『真ん中』と略す。集英社, 2017)で芥川賞候補となった温又柔は、3歳より両親とともに日本に移住し、幼少期は台湾語・日本語・中国語の三つの言葉が混ざり合う環境で育ち、更に『空港時光』(河出書房新社, 2018。以下本書の引用はページ数のみ記す)を通して、国籍、言語、民族のズレの中に位置する境遇に対して、論証的な視野を開いている。

デビュー作「好去好来歌」とその後の『真ん中』が移民文学色に溢れる作品だと言うならば、それゆえか、後者は純文学の芥川賞の候補作に選ばれた当時、選考委員の宮本輝により、作中人物の言葉と民族の混雑に起因するアイデンティティをめぐる悩みは、「対岸の火事」や「他人事」だと批判された。言い換えれば、宮本輝はその作品を「国民文学」と対立する概念である「移民文学」として扱っていることが推察できる。

そこで、小稿は、まずホミ・K・バーバ (Homi K. Bhabha) の第三空間の概念と、西成彦による「日本語使用者が非日本語との不断の接触・隣接関係を生きるなかから成立した文学のこと」²⁾ という外地の日本語文学の定義に基づき、日本とその旧外地台湾を扱うこの作品における「空港」を、国籍、各国語の不断に接触・隣接関係を生み出す「内なる外地」と見なす。具体的には、「空港」という第三空間で「区別運動」のバランスの取れない状況を指摘し、その際に、不意打ちで顕像した「類似性」を分析する。また、文化翻訳の役割を持つ、異種言語共存のテキストが齎した衝撃は、「他者性」と「特別性」との交渉を促した過程を論じた。更に、そうした中、作中人物の自己表象と他者表象が連動するメカニズムを明らかにしたい。目的は、上記のプロセスを通して、自・他表象の置き換えによって、読者の感情移入しやすい「移動文学」に仕上げた戦略を解明することである。

2. 「空港」という第三空間

空港では主権の辺境という地理的位置ゆえに、いかなる利用客もホームアドバンテージを持たず、誰もがパッセンジャーである。作中では旅行者にとって「他者」と「主体」の境界線が互いに揺らぎやすい「空港」という特殊な場所の雰囲気が生かされている。

例えば、「異郷の台湾人」の中で、日本人の俊一郎はアメリカ留学中に、6歳よりサンフランシスコで育った台湾人女性 Jessica と恋仲となった。彼女の親族の結婚披露宴に参加するため向かった台北で、周囲に中国語が飛び交う中、Jessica とよく似た顔立ちの彼女の従姉が日本育ちであることに驚く。これは二人の「類似性」が「瞬時に顕在化する」瞬間で、また空港で東京行きの便を待ちながら、「俊一郎は奇妙に胸を弾ませながら空港を見渡す。日本で育ったという Jessica の従姉に話し掛けたいという思いを募らせて。(p. 46)」といった心境が見られる。日本ゆかりという類似性により、日本人の俊一郎と在日外国人であるはずの Jessica の従姉との権力階層は曖昧になり、親近感を持たせる「第三空間」が創出された。

「第三空間」とは、バーバが「アルベール・メンミとポストコロニアリズムの協力問題を論じる」という一文で論じた概念で、不断に変動と交渉が行われる空間である。

その「類似性」の権利を平等でありながら差異を内包する要求と見なすことには、二種類の二重のアイデンティティの認定が含まれている。まず、ここには、文化的価値の不完全な(或いは隙のある)アイデンティティの認定(我々と相手)への要求がある。これは私の述べた「区別運動」にバランスを取ることを許さない。……「見た目の類似」—それは地位、階級と権力階層化から生まれた曖昧、矛盾、及び反抗を許容すべきだ。また、相互かつ互恵的な交渉のメカニズムを創出するために、発言と調整をしなければならない。

……いうまでもなくこの二重性は想像の範疇でいう「組み合わせられる」ことではない。私がここで構築しようとする二重性の中では、その主体は自らを「まるで他者が見る通り」に見る。一種の集団による交互作用のプロセスである。それは、「不確定性」が人々に不安をもたらす瞬間、「二元」による肯定的な確認は破綻し、「組み合わせられる」ことの中での自足を乗り越え、対話をする「第三空間」に赴くのである。これこそ、類似性が論述の意味符号の中に「瞬時に顕在化する」空間である³⁾。

舞台を空港という中間地帯に置くことによって、温の「当事者性」とそこから連想される「移民」を直接に描く文学とはならず、階級性を有する中心と周縁の二元的対立から暫く焦点を解き放ち、「移動」とそれに伴う「類似性」の発見に移すことが可能になった。

そこで、本作は、旅行を前提とする「移動文学」へ焦点を移行させ、日台双方に縁のある人物を日本人と並置することで、移民とその関連作品そのものによって日本の国境や日本文学における「他者性」を曖昧にしようとしている作者の戦略として書かれたものと言えよう。作中における、自分がそうになっていたかもしれない対照組において個人の情念を呈示することにより、旅行という読者に訴える共通経験を通して、「国民」と「移民」の区別が曖昧にされている。

したがって、日本語文学が宿命的に持ち合わせている「国民文学」の規範による検査システムを弱体化し、空港で感じた疎外感によって、容易に「自らを「まるで他者が見る通り」に見る」ようにすることで、作品自体を「第三空間」に変えるのである。

2.1 「内なる外地」としての「空港」

更に、この「第三空間」を本作に沿って理解するために、温又柔がかつて、本作について「日本列島の外で「昭和」は何を意味するか、それはどう揺らぐか。日本文学の中で書きたかった」⁴⁾と述べた発言に注目したい。

日本と台湾にルーツを持つ人々を描いたが、「昭和」の面影を思わせる旧外地の台湾の人物や風土が、もしも「外地」全般に共通する大きな特徴として、「日本人と非日本人との出会いを用意する場所」⁵⁾だと理解するなら、「空港」とは日本の「内なる外地」に例えることができよう。「鳳梨酥(パイナップルケーキ)」の主人公靖之は、日本人同士の妻と母親の対立を緩和するため、妻の代りに母親の機嫌をとるために、パイナップルケーキを、お土産として購入した。そのあまずっぱい味を口にしたら時、突然、若い頃、近所に住んでいた引揚者の「湾生」松本が思い浮かんだ。松本は、台湾の南国風物を懐かしく思い、庭には「シュロチク、ゴムノキ、ヤシなど南国を髣髴させるものばかり(p.87)」を植えていた。松本が持つ台湾人のステレオタイプは、靖之の思い出の一つとなる。

一台湾は、いま、シナにのっとられている。気の毒な話だよ。リン、おまえさんの両親も苦しいだろう。本物の台湾人なら中国語なんか喋りたくないはずだ。(p.91)

この作品においては、現代と過去を合わせ鏡にすることで作品に奥行きを生み、また、二種類の過去を巡る解釈を提示している。そのほか、「鳳梨酥」に描かれた湾生の境遇も、湾生の外

地喪失感も、植民統治の暴力として暗に批判している。植民地台湾では上部階層に属す湾生が、日本内地に撤退後、「引揚者」となって、台湾の故郷を懐かしむ行為は、日本人の目には、例えば単に台湾を観光地とみなす靖之の目には、「松本の台湾時代の友人という老人たちが「ふるさと」を合唱するのを、大学生だった靖之は神妙な心地で聞いた (p.91)」と、異様な風景のように映っている。

靖之の目に松本が異質な同胞という「他者」の姿として映ることになった重要な契機も、旧外地台湾に続く「空港」に足を踏み入れたことである。

他方、「百点満点」という短編では、日本統治時代を生きた台湾人寛臣が高女卒業生の妻を連れ、憧れの日本「内地」を一緒に旅し、「汽車」に乗り込む場面を描く。小説ではたえず日本天皇から三代の家族史と、寛臣一家の三代の悲喜劇を、歴史の大きな物語と個人の小さな物語として対照的に描く。羽田空港唯一の「国際」線待合室では、寛臣が「前の天皇の崩御を見送ったばかりの日本国民にとって、新しい天皇の息子の婚約という慶事はもろ手を挙げて祝福すべきことなのだろう (p.106)」と天皇交代の1987年を思い出しつつ、「日本では一年前まで続いていた「昭和」が、台湾ではあの夏、終わったのだ。(p.107)」と、日本敗戦後の台湾返還を経てなお、気持ちの中の「内なる外地」の時間差を同時に生きていることが示される。

「天皇」を日本統治時代の象徴としつつ、自らの歳月を記録することで、この個人の記憶はつまり小さな物語でありながら、国家主義に勝る存在となる。寛臣は、戦後台湾人であることを誇りに思うが、幼少期には、日本人教師から受けた励ましも彼の自信を形作っていた。それゆえ、「あなたは台湾人だから、台湾語を喋りなさい」と思いながら、「寛臣は中国語ばかり喋るようになった自分の子どもたちにむかって、リン・シ・台湾ラン、アイ・ゴン・台湾ンウエ、と怒鳴ったことがあった (p.105)」ところが、日本統治期、日本式の教育で優秀な成果を取め、「あの頃、だれもが、寛臣を良い子だと褒めてくれた (p.107)」という叙述には、彼の矛盾したアイデンティティの心理が表れている。

上述したのは、空港という「空間」で展開される越境が、「日本語使用者が非日本語との不断の接触・隣接関係」で生じた言語レベルの問題だけでなく、登場人物の記憶により、戦前戦後の広い「内なる外地」の「時間」軸も「瞬時に顕在化」されることである。日本統治生まれの世代の物語に触れた際、台湾が日本による植民統治を受けた「外地」だった時代の記憶も喚起される。

2.2 置き換え可能な人生

空港という「内なる外地」と接することによって、「他者性」が「見た目の類似」に見え、アイデンティティ認定のバランスを取らない区別運動に置かれたため、階級と権力階層化から生まれた曖昧や矛盾は許容される。そして、この他者が持つ「見た目の類似」を理解するために、内心の対話が始まる。「そうであったかもしれない自分と、そうではなかったかもしれない自分。架空の私がことあるごとに彼方で点滅しているのを感じる。(p.141)」という感想は、読者にも置き換え可能な別人生のイメージを喚起するであろう。

例えば、「日本人のようなもの」という収録作では、台湾生まれ、日本育ちの怡婷と、台湾で育ちながら日本に憧れる従姉妹の詩婷が、羨望し合いながら相手の言葉と文化を学ぶ行為は、

まるで鏡像のようだ。日本育ちの怡婷が、「はじめから日本人みたい (p.23)」な立ち居振る舞いをする一方、詩婷は「わたしも日本で育ちたかった。あの子は台湾人っていうよりも日本人のようなものだね、なんて言われる人生を歩んでみたかった。中国語ではなく、日本語で姐姐（おねえちゃん）にそう伝えたら喜んでもらえるだろうか？ (p.24)」と想像を膨らませた。

また、「可能性」という作品は、台湾人男性教師Sと日本人女学生有貴との不倫を描いている。その台湾旅行は、二人にとって日のあたる場所で自由に呼吸できる特別な時間となる。また、有貴の誕生日が四年に一度の2月29日だという設定は、『空港時光』の作中人物が共有する「特別性」を示し、ひとりひとりが多少なりとも特別性を持ち合わせており、他者である外国人のみに付与されるものではないというメッセージを伝えている。有貴は、空港で落ち合っただけで東京に向かおうとする不倫の中年男女に出会い、こう思った。「けれども、そうすることを、選ばない、とわたしは決めたのだ。それを選ばなかったことで得られる人生のほうが、自分にはずっとふさわしいはずだと期待して (p.69)」いる。彼女は、民族や階層を区別する以前に、この「見た目の類似」を啓発として受け止めた。

もしも「見た目の類似」が読者によって偶然の巡り合いとして読み取られれば、「他者」と「主体」の境界を揺るがす「移動文学」の他者性に双方向性を賦与する機能が活かされていると言える。したがって、読者にとっては登場人物の境遇を自身と置き換えて共感することが容易であり、それによって中心主義の「国民文学」の権威を失わせることになるのだ。

3. 異言語の接触による「他者性」の平準化

たとえどんな場所においても、「他者」と「主体」の境界線が硬直化している日常生活では、往々にして「マイノリティ」と「マジョリティ」の二つのグループが生み出される。

「あの子は特別」という短編では、台湾在住の駐在員の子どものススムが、周囲の日本家庭が台湾社会と距離をおいて自らの集団の中で生活するのと異なり、積極的に中国語を学び、台湾人の子どもの社交生活に溶け込もうとしている。温又柔のデビュー作「好去好來歌」においては、「あの子は特別」という一文は、台湾生まれ、日本育ちの主人公楊緑珠が、日本人同級生からいじめを受けた際に浴びた罵声である。本作において、この一文は打って変わって肯定的なニュアンスを帯び、集団主義を重んじる民族性を持つ日本人が、個人として友好的な選択をする可能性を展望し、言語の壁による階級性を打ち破る。

日本人にしては、ススムの中国語は特別に流ちょうだった。それもあるからか、ススムはすすんで台湾人である怡君たちと遊びたがった。あの子は特別だよ、とみんなで言い合った。大抵の日本人の子どもは、児童遊園に来ていつも自分たちだけでかたまっていた。まるで、わたしたちのことなんか目にも入っていない調子で。(pp.28-29)

日本の読者は、ここで他者である外国人の目には自分が「大抵の日本人の子ども」のように「自分たちだけで固まった」と映っているのかと自問自答することになる。このような場面では「自らの他者性」をあたかも「他者が見る通りに見る」ことになるが、異なる土地においては、言語・

民族の階級性の変化にも気づかされる。また、「特別性」を定める権力も、自らの「他者性」の発見に従い、常に自らの側にあるのではなく、それは交渉による変動の結果であるということが明らかになり、同時に他者の主体性も浮かび上がってくる。

3.1 異種言語共存 (Heteroglossia) という「実存的な衝撃」

前述したように、芥川賞の審査委員の宮本輝は、『真ん中』の内容を、「対岸の火事」だと評した。筆者は宮本氏の立場は言語による階層性構造を如実に再現していると考えざるを得ない。また、自らが有る言語の上層階級の使用者であることに無自覚な者は多いと言える。『空港時光』にまつわる上記の芥川賞事件の報道から見て分かるように温が訴えている読者の一部は、民族や言語に関してアイデンティティ危機を感じたことがない日本人の読者である。それに対して、温又柔は日本語の環境が常に外来語に開かれている「振り仮名(ルビ)」と注という空間の可能性も切り拓いている。彼らにとって、上記の危機を、「内なる外地」である空港という場所に「瞬時に顕在化」させている。

温はかつて「失敗也不壊(失敗しても悪くない)」(『聯合文學』410期)と題した文章で、彼女が愛する中国語と台湾語の言葉の多くは、「記憶中令人懐念的字句(記憶に懐かしく思う言葉)」だと述べている。そこで、筆者はテキストにおける言葉の表現を整理してみた。表1において、温が日本語の文脈に集め、引用したいくつかの混用表記は、11種類に分けられる。

(1) は完全に中国語の文脈(context)だが、日本語で表現され、(2)では中国語と日本語の文脈が交差しており、(3)は、温又柔が語学教室で学んだ中国のピンインを用いたもので、日本語を理解する中国人やピンインを学習している日本人といった言語の越境経験者も、テキストの読み手に想定していることを示唆する。

(4) は、日本語の表記で台湾語の音声を表すが、漢字が中国語の理解者に橋渡しをする。(5)はカタカナのみで台湾語の音声を表記する。例えば、リン・シ・タイワンラン、アイ・ゴン・タイワンウェ。日本語も台湾語も理解する者のみ、その意味が「あなたは台湾人だから、台湾語を喋りなさい」だと分かる。日本語しか分からない読者も、この文は文脈によっていくらかは推知できるはずだ。

(6) は日本語によって意識している。読者に中国語の意味を理解してもらう上で、読みの流暢さが保たれている。

(7) 台湾語に日本語の解釈を記す。例えば、^{おば}阿姑、^{おば}阿嬷等。台湾では家族の呼び方の複雑さと親族の関係をより重視する文化の違いを表す。日本語ではいずれも「おば」だが、台湾語ではそれぞれ異なる人物を指す。

(8) は、台湾語の音声を日本語によって解釈する。この部分は、外省人出身の東山彰良が『流』では使っていない表現⁶⁾でありながら、温又柔のテキストでは特に目立つ表現となる。例えば、^{心配しなくていいよ}ピエン・ファンロー、^{おれがいったい}ワ・ンーザイヤ、^{なんの罪をおかしたという}ワ・ゾン・シヤメ!、^{かわいそうな子ども}パイミヤアエギンナア等。温又柔の特徴の一つとして、同様に台湾人日本語作家の東山彰良と異なり⁷⁾、台湾語を母語の一つとする表現があることを物語っている。両者ともに異種言語共存(Heteroglossia)の表現として、註解、補足などの文化翻訳を行うのだが、換喩的に、その背景にある中日台の言語及び文化のコンテクストには個人差があり、それぞれの傾向と形式は異なっている。

(9) は中国語の漢字に中国語の発音が注釈を付ける。例えば、清粥=お粥、油條=塩味をつけた小麦粉で作った揚げパン、鹹菜=台湾風漬物など、多くは台湾特有の食べ物を形、音、義の三者で併記している。

(10) は西洋の概念について中日二言語の訳を併記する。例えば、^{ハンサム}帥哥、^{テロ}白色恐怖、^{パスポート}護照、^{ボーディングカード}登機證など。これは英語が、中国語と日本語の使用者の共通語で、旅行者の共通語の特徴を有することを物語っている。

(11) は、英語によって日本語の解釈、或いは日本語の外來語を表記する。例えば、^{Chinese}中国語、^{sensitive}繊細など、直接英語で表し、日本語が英語のコンテクストを吸収している現実を表す。

まとめて言えば、日本の読者にとって、上記の多くはその表記でだいたい意味を推知できるが、(3)(4)(5)の表記については、その意味を推知しがたいため、作品中の異化作用を成している。

なかんずく表1の一部は、片言のため、日本語の文脈からは完全に理解しかねる。予想される日本語の読者にとっては、あたかも異国の税関に臨み、日本語というパスポートの使いやすさが試されているかのような読書体験となる。温又柔は、日本語のコンテクストに内在する、外來の言語に開かれる空間「標示仮名(ルビ)」と注を、文化翻訳の実験の場として生かしている。その中では、日本語に対して、翻訳不可能な場面の描出や境界への侵攻を繰り返し、日本語の優越性を問い直す。その過程からは、作者温又柔の文化的差異の主体としての姿勢が見えてくる。

「標示仮名(ルビ)」と注は、まさにバーバが言った、言語の外來性を日本語に持ち込むものであり、その「表象自体に内在する表象の問題」⁸⁾にこそ、文化翻訳の新しさを見出せる。表1のように、日本語のコンテクストで他の言語の原語と原音に還元することには、「空港」が彷彿させる「内なる外地」たる「第三空間」における、英語の優位や、中国語・台湾語と日本語の権力関係において絶え間ない階層関係の変化とバランスを取る運動が見受けられる。時には、主要言語を意味する地の文において、中国語・台湾語が取って代わることもある。もともと、日本語に備わる、新語を受け入れる寛容性が、多くの移動者が使用している言語の形、音、義をいっそう明らかにした。その中には、「闘いつつ補う相補性というこのプロセスにこそ、『翻訳不能なもの』の種子が宿されている」⁹⁾と言えよう。

この「翻訳不能なもの」の例として、表一の(3)(4)(5)が該当する。これらの「語彙」は温又柔が台湾の親族関係や、台湾語音声をより多く「収集」し「引用」の形で「再生」することで、日本語のコンテクストに受け継いだものである。たとえ、温が言葉の意味を誤解した場合や¹⁰⁾、読者にとって全く解釈の付かない台湾語を使用する場合¹¹⁾であれ、文脈から推測すれば、表現として完全に理解できないことはない。

更に読者は、この異種言語共存(Heteroglossia)の多極構造を理解しようとする時、不安に付きまといわれ、「区別の運動」のバランスを取れずに、言語的階層性をいったん棚上げするだろう。この作者の「闘いつつ補う」文化翻訳でも「翻訳不能な」「理解不能な」ものが「実存的な衝撃」として残され、その余韻は、やがて自らが他者からも他者だと見られている疎外感へと変化する。それによって、自らの「国民文学」伝統におけるナショナルリズムの価値観への同調が、如何に強固なものかを思い知らされる。そして、「国民文学」か「移民文学」かといった観点から温の作品を読むこと自体が、文学性を凌ぐ問題¹²⁾であると気づくはずである。

ところが、この異種言語共存の多極構造を分析することによって、温文学の変遷をも理解で

きる。西成彦は、かつて『バイリンガルな夢と憂鬱』(人文書院、2014)で、「足し算されたバイリンガリズム」¹³⁾と「割り算されたバイリンガリズム」¹⁴⁾という言い方で、相異なるバイリンガル状態が齎し得る可能性の解釈を試みている。前者は、母(国)語ともう一つ熟知している別の言語を同時に使いこなす状態。後者は、母語自体が分裂している状態を指す。この理論的枠組みによって、二元対立の思考を打破することができる。

西成彦は、『外地巡礼』において、この理論を用いて温又柔のエッセイ集『台湾生まれ日本語育ち』を論じ、温が「言語の「引き算」に必死で抗う」¹⁵⁾作家であり、また「たったひとつの母語=母国語」を基点にして「足し算」のように「外国語」を学ぶしかないモノリンガル話者に対して、「母語」と「母国語」の間に罅が入った状態に置かれた多言語使用は、「割り算」……の結果に生じた言語と言語の間の「溝」に苦しめられるのである¹⁶⁾と分析している。もしこの分析をもって、さらに温の『空港時光』を考えれば、温はたしかに「好去好來歌」で言葉の「溝」に苦しめられる状態を描いている。しかし、温は『真ん中』をターニングポイントにし、『空港時光』になると、完全に戦略的にこの「溝」を「第三空間」として転用したと言える。

3.2 「言葉」の衝撃から開かれた倫理的な「対話」

上記のように、『空港時光』は「振り仮名(ルビ)」と注を通して、言語間のダイナミックな降伏とせめぎ合いを演出することによって、重層的に解釈可能な空間が生まれ、さらに単一言語の使用者が具体的に理解できない多言語の使用により、異種文化翻訳でも「翻訳不能」「理解不能」ものが「実存的な衝撃」をもたらしつつも、場合によっては、言葉の制限を超えて、「翻訳・理解不能」言葉でも、誤解を恐れぬ感情の交流を行っている。

「百点満点」という短編では、「意味さえつうじあっているのなら、親と子で、別々の言語を口にするというのは特におかしな状況ではない。(p.105)」という記述によって、親と子が、異なる言葉を操っても、気持ちを通わせられることを描く。つまり、表1の(5)のように、言葉は民族の境界線に成り得ても、理解の境界線になるとは限らないということである。この異種言語共存が齎した衝撃が、「理解不能」言葉であっても、倫理的な対話を回避させない役割として機能している。

もう一つの例として、「親孝行」という収録作を挙げてみよう。白色テロで惨死した^{おじ}姑丈の遺児の文誠は、語り手の文建とは兄弟同様の間柄である。日本で成功した文誠は、育ての親に当たる文建の両親と文建を日本観光に招待する。待合室での、各種の言語サービスは、文建の両親に日本時代を思い出させた。それぞれ台湾語と日本語の異なる言語で、会話するシーンも描かれている。

父は一步も日本に足を踏み入れたことがない。それなのに父は、ことあるごとに富士山の神々しさを語り、天皇陛下がお住まいの皇居を死ぬまでに一度は拝みたいと繰り返してきたのだ。……「まさか生きてる間に、あたしまでナイチに行ける日が巡ってくるとはねえ」ナイチ、という響きを文建はずっと台湾語だと思っていた。日本不是内地。文建は言わずにいられない。日本是外國。だからこれ(筆者注:パスポート)が要るんじゃないか。(p.59)

まさに、「ナイチ」と「外国」といった二つの言い方は、同様に日本を指すと理解できるが、実質的にその文脈は全く異なるものである。たとえ、国民文学こそ日本文学だと信仰している者にとっても、この語彙の違いは、「他者」の異なる文脈に気づかせるという衝撃を与えるはずだ。バーバの前掲文では、こうした衝撃は、更に倫理観をめぐる会話に繋がると述べられている。

倫理上の衝撃は他者の「差異」から来たものではなく、それとは逆に不意打ちから来たのである。不意打ちの「類似性」或いはある物かある人の類似性により、「そのように見える」が、実質的に「似ている」のではないことが、日常生活の一つの空間を占めている。……—民族主義者は依然として彼らの信仰を持ちながら—日常の営みに突然とコントロール不能の行為の立場、或いはせめて倫理的な約束などの条件が……一種の実存的な衝撃が倫理的な「対話」を開始させるのだ¹⁷⁾。

では、こうした倫理的な「対話」が如何に展開されるかを、「到着」という短編を例に考えてみたい。日本で育ち、中華民国のパスポートを持つ咲蓉は、中国語や台湾語よりも日本語が堪能である。そして、認知症の祖母は記憶が衰え、咲蓉の日本語につられ、日本統治期日本人のキク子の家に奉公していたことを思い出して、その家の子供たちに、彼女の「国語は土まみれの国語(p.127)」だと揶揄われたことを回想し始めた。

一家団欒の「日常の営み」に、認知症の祖母が突然、「戦争がおわったら、日本人たちはみんな台湾から離れなければならなかったの。イン・チョ・コーレン……(p.128)」と回想をした。それに対して、咲蓉は「ナ・ウ・コーレン?」(p.128)と心の奥で「倫理的な「対話」を開始させる」のである。「なぜ、台湾人は、日本人にこんなにもやさしいのだろうか?いまでも、むかしも。台湾は、日本にやさしすぎる。(p.128)」と素直にうなずけずにいた。

これは、台湾の読者には、台湾内部のコンプレックスを外部の視点を通じて直視させられたものとなる。同様に、日本育ちの咲蓉にとっても衝撃であった。彼女は、同じく日本語を操る祖母との類似性に触発されて、下線部のような、なぜ祖母と異なる感想を洩らしたかについて、自身との倫理的な対話を展開し始めた。「台湾は、日本にやさしすぎる」と思う咲蓉は、「日本の国籍があってもなくても、自分はとくに日本人のようなものだから、今さら別にね、という気持ちが大きくなってゆく。……逆に、自分がパスポートまで日本のものを持つようになれば、台湾では完全に「外国人」となってしまう。それをもったいなく思う気持ちもある。(p.131)」と、二元対立による確認を取り止め、自身のアイデンティティの区別運動の不確定性をそのまま受け入れている。

この時期の温作品について、筆者はかつて「二項対立的な同一性の捉え方を撤廃し、「完璧な」言語内部の階層構造への編入を拒絶し、支配的言語の権威による貶斥を拒否することにもなる。つまり、支配的言語とその話者の強固化に加担しないことが重要なのである」¹⁸⁾と指摘し、登場人物のアイデンティティの揺れと限界を論じた。この論点と合わせて、咲蓉の内心で行われた倫理的な「対話」を考えると、「両者とも是なり」と「両者とも非なり」の間で揺れ動いている状態それ自体を維持すれば、支配的・二項対立的な言語・階層の強固化を離れ、異なる次元の物語を提出し続けられる。この立場から、複数のルーツを持つ「真ん中の子どもたち」の特

権」¹⁹⁾意識が芽生えたのだ。

「鳳梨酥」にせよ、「百点満点」や「到着」にせよ、いずれにも日本（語）における「内なる外地」をめぐる、戦前の植民統治が、いまだに日本語を通して旧外地出身の人々の記憶を統御しながらも、そのノスタルジアが親近感や喜びを呼び起こしている矛盾を描き出している。咲蓉の目には、「台湾は、日本人に優しすぎる」というアンビバランスとして映っている。日本語のマジョリティに属する作家多和田葉子も、このアンビバランスに気づき、日本は「母語の外に出ることを強いた責任がはっきりされないうち」²⁰⁾は、日本のコロニアリズムによって日本語の学習を強いられている地域の人々に向かって、「エクソフォニーの喜びを説くことも不可能であるに違いない」²¹⁾と自己規制している。

ところが、マイノリティとして作者温又柔は、その「真ん中の子どもたち」の特権から、「内なる外地」の老人たちが感じた日本（語）の喜びをも反省する。そしてこの特権は、問いを提起し、「支配的なもろもろの信念に対抗する表明」²²⁾を構築した。

そして、移動文学の形で、日本読者に自らの歴史や空間に内包されている戦後の責任を意識させることは、正に、この二項対立的な言語・階層が強固なものとなっている日常から離れた第三空間を生きる作者の特権から生まれた能動性であり、温又柔文学の本質だと思われる。それによって、「空港」を通して反射された「内なる外地」の「亡霊たちの行き場」が、「瞬時に顕在化」し、「日本の「戦後文学」が真にその終焉」²³⁾を迎えることを可能にするであろう。

4. 「他者性」の再構築へ

4.1 差異と平等を混成する

そもそも、移民者の境遇はもともと「ハイブリッドな存在」であって、完全なる「異」文化ではない²⁴⁾。前述したように、この作中人物の「他者性」は「見た目の類似」性を持っているため、『空港時光』では、「当事者性」と虚構の距離を保ちながら、「他者性」の解釈を再構築する余地がある。

例えば、『空港時光』における「異境の台湾人」という短編では、アメリカの留学先で恋仲となった日本人俊一郎とアメリカ育ちの台湾人女性 Jessica が、連れ立って Jessica の従兄の結婚式に参加する時のカルチャーショックを描いている。中国語が得意でない Jessica は台湾帰省後、両親による中国語と英語の通訳に頼りっぱなしである。上の世代の無条件な愛情により、下の世代の Jessica たちは台湾との心の距離を縮めることになった。この Jessica は、台湾生まれ、日本育ちの「到着」の咲蓉を彷彿させる。両者の設定は一見遠く見えるが、非常に近いのである。

このような距離によって、読者にテキストを作者の自伝的な小説として読ませることなく、本質主義化されている移民のステレオタイプから離れ、虚構と置換の創造的空間を創出することを可能にした。ホミ・バーバがいった「そのように見える」けど、実質に「似ている」のではないという倫理的な対話空間が開かれ、「特別性」から連想される「他者性」は、実際、置き換え可能だという描写が、他者への接近の契機となる。この共鳴の重なる地域を拡大すればするほど、作中では感情の表現にせよ、言葉の使用にせよ、いずれも他者に近づき、他者との相互理解の可能性に働きかけるのである。

そこで、我々が更に言えるのは、もしも「外国人文学」か「移民文学」の枠組みで、『空港時光』を「異文化」の文学として理解するならば、文化的本質主義になりかねない。なぜなら、それはかつて上野千鶴子が提示した、日本社会の多文化主義の発展の問題点にも繋がっているからである。

多文化主義にはふたつのバージョンがあります。ひとつは「差異を承認せよ」という「承認の政治」です。そうすると、お前の差異と真正性（本ものらしさ）を証明せよという要請に迫られます。これが本質主義や特殊主義につながります。もう一方で「差異はないから同じように扱え」という平等の要求です。そうすると個人化や普遍主義が進む一方で、特殊な差異は認めない、ということになります²⁵⁾。

温の前の作品「好去好来歌」や『真ん中』などは移民（とその二世）を主人公とする色が濃く²⁶⁾、それが「外国人」文学と見なされたのは、文壇がその文学を移民文学と位置づける「本質主義」による結果であろう。温の創作プロセスにおいて、「好去好来歌」の趣旨は、後者の「平等の要求」の要素が強く、『真ん中』に至って「平等の要求」と「差異を承認せよ」の間から、温独自の真ん中の概念を生み出した。

そこで、真にその文学の本質を文学の技法によって伝えることに成功したのは『空港時光』であろう。そして、その本質は、彼女の個人的な混雑性に帰されるのではなく、世界的な視野で、もっと広い世界の現実の枠組みにおいて、自己表象が他者表象を映し出す、パラレルワールドのような環境の対照性を浮き彫りしている境遇を描くことである。

『空港時光』においては複眼的に各種の人物設定をすることで、「純正」の日本人や台湾人を巡る思考を、「対話の能動性」に変え、異なる方向へと切り替えるのである。

総じて言えば筆者は、「アイデンティティの政治」を、3で論じた「あの子は特別」という一文の反転の例のように、社会から貼られた否定的な価値判断のスティグマを積極的に受け止めた上、価値判断をひっくり返す行為と定義してみたい。そうすることで、「文化本質主義」は、マイノリティ・マジョリティグループを対立させやすいという弊害を内包しながら、アイデンティティの流動性を保ち、本質主義の硬直化に陥るのを避けることを常に意識することになる。こうして、アイデンティティの強調と否認に拘らず、同時かつ戦略的に主流と相互の「混雑」化を進めることで、「他者表象」に「自己表象」を投影することも、社会が期待する「他者性」と交渉し対抗する過程になる。

4.2 自己表象と他者表象が連動するメカニズム

ジル・ドゥルーズ (Gilles Deleuze) とフェリックス・ガタリ (Félix Guattari) (2017) の名作『カフカ マイナー文学のために』(法政大学出版) は、かつてチェコのユダヤ人のカフカがドイツ語で創作することを例証として、「マイナー文学」の三つの特徴を要約した。それは「言語の脱領土化、個人的な事項がじかに政治的事項につながるということ、言表行為の集团的アレンジメント」²⁷⁾となる。『空港時光』に即して言えば、その多言語使用が国の領土を超え、集団の記憶としての言語を引用し、異種言語共存の力学を再構築したことは、一点目の実践に相当

する。

そして、二つ目の特徴を表す例は、「到着」という短編における、「中華民國籍の男子には兵役の義務がある。咲蓉と笑美のどちらかが男の子だったのなら、父は日本国籍の取得を決意したかもしれない。日本で育った我が子が台湾で兵隊に行かずに済むように。娘しかないから、父と母は帰化しそびれた (p.121)」という表現が当たる。これは、家庭内の個人的決定でありながら、台湾の政治と直接係わる。その力学はアイデンティティの差異と平等をめぐる政治的な戦略的な「混雑」化する意思決定の過程を再現した。

そして三点目について、Gilles Deleuzeらが「たとえ作家が周縁にあり、脆弱な共同体から孤立していようも、この状況のせいで彼はなおさら別の潜在的共同体を表現」²⁸⁾ することと解釈している。

では、この作品はいかに「言表行為の集団的アレンジメント」をしているのだろうか。日比嘉高は、かつて在日の外国籍を持つ作家温又柔、リービ英雄、そして、海外在住の日本人作家水村美苗、多和田葉子などの越境作家を比較し、言語の「開放性」²⁹⁾ を強調し、「過去の重荷や抑圧の記憶から言語的冒険を切断しようとする方向」³⁰⁾ が、彼らの共通点だと指摘している。現に日本文学と比較される「抑圧の記憶」と切断しつつ、この潜在的な共同体は、「内なる外地」として、または置き換え可能の複数のルーツを持つ別の共同体として表現されてきた。

総じて言えば、旅行文学での異文化接触による新鮮感などによって他者に向けた視線は、観察者（自己）の主体性と重なることがあることを提示し、互いに峻別されるものではないことが示されている。これこそが、ドゥルーズらが言った「言表行為の集団的アレンジメント」である。

温又柔の自己表象の形成過程において、「特別」という言葉は、重要なしるしである。例えば、彼女は2018年『聯合文學』の399号のコラムで、「幼い私の中に芽ばえた自尊心は、ようやく自分と他の子どもたちと違う確実な証拠を見つけた。私は、台湾人。だから特別だ」として過去を吐露している。重層的なアイデンティティを持つ温又柔は、この創作の姿勢により、『空港時光』のたとえ「他者表象」をしても、「代弁者」に足るだけの「自己表象」の色を反映させている。そして、この「互惠的に調整する」ための、「自己表象」と「他者表象」が連動するメカニズムが、彼女が創作する上でのもう一つの「特権」となる。

例えば、「台湾は、日本にやさしすぎる。(p.128)」と類似する感概は、吉田修一もかつて台湾高速鉄道物語『路』^{ルウ}を書く時、日本人作家としての立場から触れたことがある。但し、吉田の「純正」なる日本人の立場により、彼が描く「湾生」葉山勝一郎老人は、戦前台湾で親しかった友人呂耀宗を貶し、そしてその愛する女性を奪い取った。戦後、葉山が台湾を訪ね、呂耀宗に謝って、こう言った。「俺たちの友情を裏切った。自分たちの友情を踏みにじった。どんなに詫びても許してもらえないようなことじゃない。でも、この六十年の間ずっと後悔しながら生きてきた (p.424)」。そして呂耀宗は葉山を慰め、「俺たち台湾人ってのは、つらかったことより、楽しかったことを覚えているもんなんだ。(p.425)」と言った。男涙を流した葉山を見ながら、続いて、「……でもな、勝一郎、それを教えてくれたのは、あんたら日本人なんだぞ (p.425)」と返事した。

ところが、こうした描写は、当時、日本人評論家の新井一二三から「宗主国の姿勢の嫌い」³¹⁾

があると批判された。だが、吉田の描写は多かれ少なかれ、一部の台湾人の寛大さを描き出しており、それは一部の事実を反映しているが、やはり吉田が日本人であるがゆえに、「他者を表象する」正当性が疑われ、「他者による表象」としか認められなかったといえよう。

そこで、ここで言えるのは、「言語」はパスポートのようなもので、テキストにある異種言語共存 (Heteroglossia) の言語使用は、恰も多重国籍者が複数のそれを持つように、「空港」という第三空間であれば、異なる人物に自由に感情移入しやすい。しかしながら、「パスポート」も「言語」とまた同じく、ある種の法律の規則、或いは暗黙の了解で境界線を作りえるものだが、いずれも期待されている「他者性」そのもので、当事者の感情の自由な流れを制限することはできない。

エッセイ「音の彼方へ」の中で温又柔はこう言った。一旦、パスポートという「生命線を絶たれたその旅行者は、通行権を与える権限を国家が独占する世界のなかを、あてもなくさまようしかない (p.134)」。ところが、中華民國のパスポートを持つ咲蓉が「日本は、わたしにとって、外国じゃありません (p.129)」と思うように、気持ちは国籍を凌駕する存在で、パスポートによって定義されるものではない。「自分と翠蓉は、逆だったかもしれない。台湾で育ったわたしと、日本で大きくなったあの子 (p.130)」の二人が共鳴し合う可能性、そして人生は置き換え可能だと想像する自由は、「言語」と「パスポート」に制限されることができない。「他者」への関心を高めること自体が、自・他表象を連動させるだけでなく、両者の境界線、また「他者性」とも言えるものをも再構築させるのである。

5. 終わりに 「他者性」から「相互主体性 (intersubjectivity)」

小稿は、「空港」を、国籍や各国語の不断に接触・隣接関係を生み出す「内なる外地」と見なすことによって、それが言語的・民族的な「区別運動」のバランスの取れない「第三空間」に変じたことを指摘した。この空間で展開された「移動文学」は、「瞬時に顕在化」した他者との「類似性」を描くことによって、自己と他者に双方向に「他者性」と「特別性」を賦与したと分かった。こうした、自らを「まるで他者が見る通り」に見る表現や、異種言語共存のテキストが齎した衝撃は、「自己表象」と「他者表象」を連動させるメカニズムを創り出した。

やがて、それは、フッサール (Edmund Husserl) が言う「相互主観性 (intersubjectivity)」³²⁾ が生まれ始め、即ち「世界経験は、私のまったく私的な経験なのではなく、共同体経験である」³³⁾ という置き換え可能な「言表行為の集団的アレンジメント」に繋がる。(敬称略、本成果の一部は台湾科技部 MOST 108-2410-H-160-003- の助成を受けたものです。ここに記して合わせて感謝の意を表したい。)

注

- 1) 文藻外語大学日本語文学科准教授
- 2) 西成彦 (2018) 「外地巡礼—外地日本語文学の諸問題」『外地巡礼』、みすず書房、p.264。
- 3) 2002年6月19日、台湾交通大学主催の「文化研究国際キャンプ」で Homi K. Bhabha が講演した「The Question of Solidarity Today: Rethinking Albert Memmi」という内容は、その後、霍米・巴巴 (Homi K. Bhabha) 著、蘇子中訳 (2006) 「探訪梅密及後殖民之協力問題」、劉紀蕙編『文化的視覚系統 I：帝國

- 「アジア—主體性」(麥田出版 pp.138-139) に収録されている。原文は「將「相似性」的權利作為對平等中含有差異的要求, 包含兩種雙重身分認證。首先, 這裡有對於帶有文化價值的、或具間隙的) 身分認證要求——我們的與對方的——這要求不允許我所描述的「分辨運動」達到平衡。……「看起來像」——它必須容許地位, 階級與權力層級化所產生的曖昧, 矛盾與反抗, 為了創造互相與互惠的斡旋機制而必須發言與調整。……不用說, 雙重性不是關於想像領域中的「配對」。我在這裡建構的雙重性, 其中主體視他自己「如同他者所見」, 是一種團體效應的過程。是「不確定性」令人不安的那一刻挫敗了「二元」的肯定確認, 而超越了自己自足「配對」的不斷重複之外, 而朝向對談的「第三空間」。這就是相似性在論述的符號中「瞬間顯像」的空間」。日本語訳は筆者による。
- 4) 大原一城 (2018. 7. 18) 「Interview: 温又柔さん 空港の興奮から着想 日本と台湾, 多角的視点で描く」『毎日新聞』東京夕刊, 4面。
- 5) 西成彦 (2018) 『外地巡礼——「越境的」日本語文学論』, みすず書房, p.294。
- 6) 謝惠貞 (2016) 「互相註解, 補完的異語世界——論東山彰良『流』中的文化翻譯」『臺灣文學學報』29号, pp.138-144。
- 7) 謝惠貞 (2016) 前掲論文, pp.138-144。
- 8) ホミ・K・バーバ (2012), 本橋哲也訳『文化の場所—ポストコロニアリズムの位相』, 法政大学出版局 p.378。
- 9) ホミ・K・バーバ (2012) 前掲書, p.379。
- 10) 例えば「嬢子」は私生子を罵る言葉ではなく, 性生活が乱れている女性を指すので, 「息子」という作品の冠字に使用するのとは的確ではない。
- 11) 例えば「到着」で「箸を持つ手がとまった咲蓉にむかって, ——ウ・パー・ボ? 祖母がたずねる。咲蓉が, チョ・バア, と祖母にむかって笑ってみせる」(p.128) という表現は, その片仮名の部分は, 台湾語か中国語か, 何の意味かはまったく説明されていない。
- 12) 土屋勝彦 (2009) は, かつて『越境する文学』(水声社, p.100) で, 「国民文学」と「移民文学」の区別自体は, 文学性を凌ぐ問題だと批判した。
- 13) 西成彦 (2014) 『バイリンガルな夢と憂鬱』人文書院, pp.149-150, p.269。
- 14) 西成彦 (2014) 前掲書, p.269。
- 15) 西成彦 (2018) 前掲書, p.161。
- 16) 西成彦 (2018) 前掲書, pp.162-163。
- 17) 荷米・巴巴 (Homi K. Bhabha) 著, 蘇子中譯, 「探討梅毒及後殖民之協力問題」劉紀蕙編 (2006) 『文化的視覚系統 I: 帝國—アジア—主體性』 麥田出版, pp.132-133。原文は「倫理上の衝撃並不是來自他者的「差異」, 相反地卻是來自突然, 憑藉著突然「相似性」或是某物或某人的近似, 「看起來像」, 卻又不實質「相像」, 在日常生活占據了一個空間。……——種族主義者仍抱持他的信仰——至少倫理約定的條件……一種存在的衝撃開啟了倫理的「對談」。日本語訳は筆者による。
- 18) 謝惠貞 (2017) 「「国語」への質問状——在日台湾人作家温又柔「真ん中の子どもたち」を中心に」(『台湾日本語文学報』42号, p.49)。
- 19) 温又柔は「「中間の子どもたち」の特権」(台北: 『聯合文學』406号, 2018.8) で, 「過去に, こうするよう考えた自分のために, 私は「真ん中」で書く。……「両者とも是なり」と「両者とも非なり」の間で揺れる私は, 最大限に私に付与された「特権」を生かす (p.63)」と自らの創作意図を吐露している。日本語訳は筆者による。
- 20) 多和田葉子 (2012) 「8 ソウル Seoul 押し付けられたエクソフォニー」『エクソフォニー——母語の外へ出る旅 (岩波現代文庫)』岩波書店, p.71。
- 21) 多和田葉子 (2012) 『エクソフォニー——母語の外へ出る旅 (岩波現代文庫)』岩波書店, p.71。
- 22) スーザン・ソントグ著, 木幡和枝訳 (2006) 『良心の領界』, NTT出版, p.254。
- 23) 川村湊 (1995) 『戦後文学を問う—その体験と理念 (岩波新書)』岩波書店, p.11。

- 24) 塩原良和 (2012) 『共に生きる: 多民族・多文化社会における対話』弘文堂, p.55。
- 25) 朴鐘碩・上野千鶴子ほか著 (2008) 『日本における多文化共生とは何か—在日の経験から』新曜社, pp.215-216。
- 26) 謝惠貞 (2017) 「「国語」への質問状——在日台湾人作家温又柔「真ん中の子どもたち」を中心に」『台湾日本語文学報』42号, p.31。
- 27) Gilles Deleuze, Felix Guattari (2017) 『カフカ マイナー文学のために』法政大学出版, p.32。
- 28) Gilles Deleuze, Felix Guattari (2017) 前掲書, p.30。
- 29) 日比嘉高 (2015), 「越境する作家たち——寛容の想像力のパイオニア」『文学界』6月号, p.224。
- 30) 日比嘉高 (2015), 前掲論文, p.225。
- 31) 原文は「宗主國心態之嫌」。新井一二三「新井一二三: 新時代日台文學」『名人堂電子報』2012.12.13。 <https://paper.udn.com/udnpaper/PID0030/228582/web/> (2020.9.24 確認)
- 32) フッサールなどの現象学者が提唱した概念。相互主観性や, 共同主観性ともいわれる。『ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典』によれば, 「純粹意識の内在的領域に還元する自我論的現象学的還元に対して, 他の主観, 他人の自我の成立を明らかにするものが間主観的還元であるが, それは自我の所属圏における他者の身体の現出を介して自我が転移・移入されることによって行われる」となる。 <https://kotobank.jp/word/%E9%96%93%E4%B8%BB%E8%A6%B3%E6%80%A7-48882> (2020. 4. 25 アクセス)
- 33) 浜渦辰二 (1990) 「他者と異文化—フッサール間主観性の現象学の一側面—」『哲学年報』第49輯 九州大学文学部紀要, p.101。

参考文献

【日本語】

- 新井一二三 (2012) 「新井一二三: 新時代日台文學」『名人堂電子報』 <https://paper.udn.com/udnpaper/PID0030/228582/web/> (2020. 9.24 確認)
- 大原一城 (2018. 7. 18) 「Interview: 温又柔さん 空港の興奮から着想 日本と台湾, 多角的視点で描く」『毎日新聞』東京夕刊, 4面。
- 川村湊 (1995) 『戦後文学を問う—その体験と理念 (岩波新書)』岩波書店
- 川村湊, 野崎敏, 村田沙耶香 (2010) 「創作合評 (第412回) 「予言残像」 牧田真有子「乙女の密告」 赤染晶子「来福の家」 温又柔」『群像』65-7
- 小泉康一, 川村千鶴子 (2016) 『多文化「共創」社会入門——移民・難民とともに暮らし, 互いに学ぶ社会へ』慶應義塾大学出版会
- カロリン・エムケ著, 浅井晶子訳 (2018) 『憎しみに抗って——不純なものへの賛歌』みすず書房
- 佐藤慎司, ドーア根理子編 (2008) 『文化, ことば, 教育—日本語/日本の教育の「標準」を超えて』明石書店
- 塩原良和 (2012) 『共に生きる: 多民族・多文化社会における対話』弘文堂
- ジル・ドゥルーズ (Gilles Deleuze), フェリックス・ガタリ (Félix Guattari) 著, 宇野邦一訳 (2017) 『カフカ (新訳): マイナー文学のために』
- 謝惠貞 (2016) 「互相註解, 補完的異語世界——論東山彰良『流』中的文化翻譯」『臺灣文學學報』29号
- 謝惠貞 (2017) はかつて「「国語」への質問状——在日台湾人作家温又柔「真ん中の子どもたち」を中心に」(『台湾日本語文学報』42号)
- スーザン・ソントグ著, 木幡和枝訳 (2006) 『良心の領界』, NTT出版
- 多和田 (2012) 『エクソフォニー——母語の外へ出る旅 (岩波現代文庫)』岩波書店
- 西成彦 (2014) 『バイリンガルな夢と憂鬱』人文書院
- 西成彦 (2018) 『外地巡礼』みすず書房

朴鐘碩・上野千鶴子ほか著 (2008)『日本における多文化共生とは何か—在日の経験から』新曜社
浜渦辰二 (1990)「他者と異文化—フッサール間主観性の現象学の一側面—」『哲学年報』第49輯九州大
学文学部紀要

浜崎桂子 (2017)『ドイツの「移民文学」：他者を演じる文学テキスト』彩流社

日比嘉高 (2015)「越境する作家たち—寛容の想像力のパイオニア」『文学界』6月号

【中国語】

荷米・巴巴 (Homi K. Bhabha) 著, 蘇子中譯, 「探討梅毒及後殖民之協力問題」劉紀蕙編 (2006)『文化的
視覚系統 I : 帝國—亞洲—主體性』麦田出版

表1 (括號の数字はページ数)

音訳	(1) 中国語の漢字に中国語の音声を日本語で表記
	爸爸 (73, 76, 77, 78), 媽媽 (73, 76, 77), 大哥 (73, 74, 78), 迪化街 (84)
	(2) 中国語の漢字に日本語の音読みを表記 (漢字訓読)
	閩南 (101), 咲蓉 (108), 台鉄 (170)
	(3) 中国語の漢字にピンインで漢字の音声を表記
成龍 (8), 詩婷 (16, 24), 怡婷 (17), 阿伯 (17), 不知道 (20), 阿媽 (25), 雅鈴 (26), 怡君 (26), 再見 (27), 拜拜 (27), 進 (28), 護照 (36), 俞涵 (38), 圓山大飯店 (39), 文健 (47), 文誠 (49), 咖啡 (66), 冠宇 (71), 役男 (75, 78), 翠蓉 (110), 千晴 (117), 貴族 (118), 單身貴族 (119), 志豪 (119), 我們國家 (121), 溫柔 (152), 西班牙 (153), 同胞 (155, 156), 娜路彎 (158), 芭樂 (160), 番石榴 (161), 臺鐵 (170), 金針花 (171)	
(4) 日本語で台湾語 (閩南語) の音声を表記	
鳳梨酥 (目次, 81, 87, 89, 90, 92), 阿姑 (48), 米粉 (59), 魯肉飯 (59, 116), 牛肉麵 (59), 婁子 (74), 寬臣 (95), 阿梅 (114)	
(5) 日本語の片假名のみで台湾語 (閩南語) の音声を表記	
リン・シ・タイワンラン, アイ・ゴン・タイワンウエ (105), ウ・パー・ボ? (128), チョ・パア (128), シアンナ・エタンアネ? (129)	
意識	(6) 中国語の漢字で日本語の解釈を表記
	姐姐 (17, 19, 20, 21, 22), 阿公 (19, 21, 22, 23, 32), 涼台 (18), 哥哥 (20, 21, 24, 51, 56), 不知道 (20), 爸爸 (20, 22, 50), 阿伯 (20), 姑姑 (20, 22, 125), 好久没見 (21), 歡迎 (25), 你好 (27, 34), 謝謝 (27, 34), 明白了 (27, 34), 原來如此 (27, 34), 公寓 (28), 餐廳 (29), 母語 (38), パンイエーネ (真夜中だよ!) (47), 大舅 (50, 51, 55, 59), 我們 (51), 弟弟 (51), 狗去豬來 (54), 丙公 (55), 媽媽 (56, 115, 125), 舅媽 (59), 珍珠奶茶 (66), 多桑 (73, 80), 男朋友 (76, 77), 我曾經非常幸福 (79), 丙公 (101), 飛機 (108), 大姑公夫妻 (109), 姑姑 (110), 叔叔 (110), 小叔叔 (110, 119), 小姑 (110), 小阿嬤 (119), 捷運 (112), 翠蓉 (112, 118, 129), 堂兄弟姊妹 (1123), 阿姨 (114), 一個人? (114), 晚飯準備中 (114), 不用 (114), 小叔叔 (122), 姑姑 (125), 你幾歲? (144), 不要哭。 (144), 乖孩子 (114), 台湾 (149), 奇怪, 哪兒有問題? (155), 您有沒有戴手表等? (155), 用筆來歌 (158) 談, 你說的是台語! (161), 溫又柔, 你說這個是什麼? (162), 多麼無聊, 當然是芭樂阿! (162), 我要畫畫! (172)
(7) 台湾語の漢字表現に日本語で解釈をつける	
阿姑 (48, 49), 阿伯 (109), 阿公阿媽 (109), 阿嬤 (110), 姑婆 (124, 125), 阿媽 (126)	

二重翻訳	(8) 台湾語 (閩南語) の音声に日本語で解釈をつける
	ナ・ウ・ゾーリン! (31), アヒア (48), ボーアンナ (48), ビエン・ファンロー (48), ワ・シーザイヤ, ワ・ゾン・シヤメ! (49), バイミヤアエギンナア (49), リーゴン, ベリゴン, ベリゴン, ツァア・ワ・キ・グア・フジサン? (54), エイ, リ・アンナ (58), ナア・アネ・ゴン (99), イ・ゴン・デョー (100), グン・シン (102), リップラン・ドワイ・グン・チンホウ (104), リン・シ・タイワンラン, アイ・ゴン・タイワンウエ (105), ベヤウキン (115), イン・チョ・コーレン... (128), ナ・ウコーレン? (128), アネホーボ? (144), レ・リップン, ベータンチャアバラア! (160)
(9) 中国語の漢字に中国語の音声か注釈をつける	
台湾式の料理 (清粥 = お粥, 油條 = 塩味をつけた小麦粉で作った揚げパン, 鹹菜 = 台湾風漬物, など など) (159)	
(10) 西洋の概念の中国語に日本語の翻訳を併記	
帥哥 (32), 白色恐怖 (54), 護照 (57, 59), 登機證 (57, 59), 水果茶 (66)	
(11) 日本語にある外来語に, 英語で解釈する	
中国語 (37), 繊細 (39)	

『立命館言語文化研究』編集委員会

委員長 田浦秀幸

委員 有田節子

河原典史

COULSON, David

住田翔子

西岡亜紀

事務局 木下円子

立命館言語文化研究 33巻1号(通巻144号)

2021年7月20日 印刷

2021年7月30日 発行

発行者 田浦秀幸

発行所 立命館大学国際言語文化研究所

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

TEL (075) 465-8164

E-mail: genbun@st.ritsume.ac.jp

印刷所 ㈱田中プリント

言語文化 研究

33巻1号
2021年7月
July 2021 / vol.33 no.1

2) Pilgrimage as a Method of Literary Studies” Building a Foundation for Comparative Research on Post-Colonial Literature (International Institute of Language and Culture Studies, Ritsumeikan University)

Colonizing Genres on the Imperial “*Gaichi*” (Outer Lands):
Taxonomic Anxieties, Mysterious Media Ecologies, and
Popular Empire Writing HAAG, Andre Robert

The Transiting of Irish Literature of the 1930s and
Modern Taiwanese Literature Wu, Pei-chen

Experience of Colonial Land and the Politics of
Translation, with a Focus on Jeong Ji-yong’s Poetry.
KIM, Donghee

Considering Multilingual Shanghai (Fragments from
My Open Diary, July and August, 2018)
NISHI, Masahiko

A Second-Generation Coloniser and Korea:
An Exploration of Dialogue and Resonance
in Kazue Morisaki’s Poetry SUGIURA, Kiyofumi

War Narrative and Taiwanese LGBT Literature
MISU, Yusuke

A Study of *Airport Time* by the Taiwanese Japanese-
Language Writer Wen You-Rou; Inner “*Gaichi*” and
Interlocking Representations of the Self and the Other
XIE, Huizhen

Neuro-psycholinguistic Research on Eye-tracking in Reading Language Attrition in Chinese-Japanese-English Trilinguals” Exploratory Research Project A2 Neuro-psycholinguistic Approaches to Bilingualism (International Institute of Language and Culture Studies, Ritsumeikan University)

9 Introduction
TAURA, Hideyuki

5 An fNIRS Study on Language Attrition and Acquisition
in a Chinese Learner of Japanese Residing in Japan
from a Neuro-psycholinguistic Perspective
SHI, Linghui / TAURA, Hideyuki

159 An Eye-Tracking Case Study on the Reading
Mechanisms under Articulation-Suppression
Conditions in a Chinese-Japanese-English Trilingual
GUO, Xiangting / TAURA, Hideyuki

“Applied Bilingualism Studies” Exploratory Research Project B1 Research on Bilingualism (International Institute of Language and Culture Studies, Ritsumeikan University)

181 Introduction
TAURA, Hideyuki

185 Case Studies on Chinese-Japanese Bilingual Siblings
Residing in Japan from a Bilinguality Perspective
DONG, Jianqiu / TAURA, Hideyuki

209 A Study on Dialectal Differences in Refusal Strategies
between Cantonese and Mandarin Chinese Speakers
from the Perspectives of Intimacy and Seniority
YUEN, Chan Hang

231 Motivational Factors in Vietnamese Learners of Japanese
— A JSL Study Based on Maslow’s Hierarchy of Desire
HIROTA, Emiko

Articles

261 Sugawara no Michizane - The Road to Exile
CAPASSO, Carolina

279 Reflections on Two Anthologies of Afro-Cuban Poetry
AMBO, Hironao

国際言語文化研究所プロジェクト 比較植民地文学研究の基盤整備 (2) 特集「外地巡礼という方法」

1 Colonizing Genres on the Imperial “*Gaichi*”
(Outer Lands): Taxonomic Anxieties, Mysterious
Media Ecologies, and Popular Empire Writing
ヘイグ アンドレ

27 一九三〇年代におけるアイルランド文学の越境と台湾新文学
呉 佩珍

39 植民地体験と翻訳の政治学
——「朝鮮詩集」に収録された鄭芝溶の作品を中心に——
金 東億

53 「多言語都市・上海」を思う・続
([日録] 2018年7月～8月より) 西 成彦

79 植民者二世と朝鮮
——森崎和江の詩におけるダイアログ、そして共振について——
杉浦清文

97 戦争と「同志」叙事
——大島渚「戦場のメリークリスマス」から
明毓屏「再見、東京」へ—— 三須 祐介

111 在日台湾人作家温又柔『空港時光』研究：
「内なる外地」と自我表象の運動 謝 惠貞

国際言語文化研究所重点プロジェクトA2 バイリンガル fNIRS 言語脳科学研究会報告 特集「中日英トライリンガル眼球運動・ 言語喪失神経心理言語学研究」

129 「バイリンガルの言語脳イメージング研究」
第2期(2016～2020年度)研究概要とその成果
田浦秀幸

135 中国人日本語学習者の滞日期間の長さによる言語喪失・
習得 fNIRS 研究：神経心理言語学的アプローチ
石 苜理・田浦秀幸

159 中日英トライリンガルのリーディングメカニズム解明研究
——構音抑制下における眼球運動に注目したケーススタディー——
郭 湘婷・田浦秀幸

国際言語文化研究所萌芽プロジェクトB1 バイリンガリズム研究会 特集「バイリンガリズム理論の応用研究」

181 「バイリンガリズム研究会」成果報告
田浦秀幸

185 在日中国人家庭児の継承語と日本語能力に関する
ケーススタディー：バイリンガリティの観点から
董 劍秋・田浦秀幸

209 断りストラテジーの広東語とブトンファの方言差研究
——親疎関係と上下関係による配慮の視点から——
阮 振恒

231 ベトナム人日本語学校生のモチベーションについて
——マズローの欲求の階層を用いて—— 廣田恵美子

個別論文

261 *Seiyō kibun*: alcune considerazioni sulla genesi
e struttura dell’opera.
『西洋紀聞』：その成立と構造に関する一考察
CAPASSO, Carolina

279 アフロキューバ主義における黒人詩の流行について
——エミリオ・バジャガスとラモン・ギラオの黒人詩アンソロジーを
めぐって—— 安保寛尚



立命館
言語文化研究

33巻1号

目次

国際言語文化研究所プロジェクト
比較植民地文学研究の基盤整備 (2)
特集「外地巡礼という方法」

- Colonizing Genres on the Imperial "Gaichi" (Outer Lands):
Taxonomic Anxieties, Mysterious Media Ecologies, and Popular Empire Writing
.....ヘイグ アンドレ (1)
- 一九三〇年代におけるアイルランド文学の越境と台湾新文学.....呉 佩珍 (27)
- 植民地体験と翻訳の政治学
——『朝鮮詩集』に収録された鄭芝溶の作品を中心に——.....金 東僊 (39)
- 「多言語都市・上海」を思う・続 (『日録』2018年7月～8月より).....西 成彦 (53)
- 植民者二世と朝鮮
——森崎和江の詩におけるダイアログ、そして共振について——.....杉浦清文 (79)
- 戦争と「同志」叙事
——大島渚『戦場のメリークリスマス』から明毓屏『再見、東京』へ——
.....三須 祐介 (97)
- 在日台湾人作家温又柔『空港時光』研究:
「内なる外地」と自他表象の連動.....謝 惠貞 (111)

国際言語文化研究所重点プロジェクト A2
バイリンガル fNIRS 言語脳科学研究会報告
特集「中日英トライリンガル眼球運動・言語喪失神経心理言語学研究」

- 「バイリンガルの言語脳イメージング研究」
第2期 (2016～2020年度) 研究概要とその成果.....田浦秀幸 (129)
- 中国人日本語学習者の滞日期間の長さによる言語喪失・習得 fNIRS 研究:
神経心理言語学的アプローチ.....石 蒼瑛・田浦秀幸 (135)
- 中日英トライリンガルのリーディングメカニズム解明研究
——構音抑制下における眼球運動に注目したケーススタディー——郭 湘婷・田浦秀幸 (159)

国際言語文化研究所萌芽プロジェクト B1
バイリンガリズム研究会
特集「バイリンガリズム理論の応用研究」

- 「バイリンガリズム研究会」成果報告…………… 田浦秀幸 (181)
- 在日中国人家庭児の継承語と日本語能力に関するケーススタディー：
バイリンガリティーの観点から…………… 董 劍秋・田浦秀幸 (185)
- 断りストラテジーの広東語とプトンファの方言差研究
——親疎関係と上下関係による配慮の視点から——…………… 阮 振恒 (209)
- ベトナム人日本語学校生のモチベーションについて
——マズローの欲求の階層を用いて——…………… 廣田恵美子 (231)

個別論文

- Seiyō kibun*: alcune considerazioni sulla genesi e struttura dell'opera.
『西洋紀聞』：その成立と構造に関する一考察…………… CAPASSO, Carolina (261)
- アフロキューバ主義における黒人詩の流行について
——エミリオ・バジャガスとラモン・ギラオの黒人詩アンソロジーをめぐって——
…………… 安保寛尚 (279)

国際言語文化研究所プロジェクト
比較植民地文学研究の基盤整備 (2)
特集「外地巡礼という方法」

Colonizing Genres on the Imperial “*Gaichi*” (Outer Lands): Taxonomic Anxieties, Mysterious Media Ecologies, and Popular Empire Writing

Andre HAAG

Genre Classifications on Imperial Ground

Attempts to name the genres of writing that historically rendered the Japanese colonial empire (植民地帝国日本) readable as prose fiction can invite a host of thorny complications related to power, space, and identity. Much like colonial taxonomies deployed to assert mastery over subject territories and populations via classification, genre as system could be analogously understood as imposing order and identity on the colonial empire's unruly cultural production and media ecologies, while facing comparable dilemmas of inclusion and exclusion. Systems of classification and categorization may, as David Spurr writes, “be seen as emblematic of colonial discourse as a whole, which everywhere imposes a system of nomination, of identity, and difference.”¹⁾

Similarly, the classification of literary and cultural genres serves to sort and group texts for the purposes of marketing or to produce an object of study, in the process maintaining hierarchies that elevate some works to a higher, “integral” status and disregard others deemed peripheral. While formal categorization is an indispensable scholarly tool, the simple endeavor of classifying literary and cultural genres encounters unexpectedly treacherous territory when texts written in Japanese move between the empire's center and the outer lands, where various boundary lines are blurred. Such taxonomic work can be particularly fraught when working between cultures and languages—i.e., English and Japanese, as I do in the following discussion. Nonetheless, the aim of this article is to center questions of genre in the Japanese colonial empire's fiction, in order to recover cultural phenomena and media ecologies that have been overlooked or obscured due the unreliability of existing generic lenses: namely, the literary works of the early colonial empire, the emerging sites of mass literature (often designated, tellingly, “genre fiction”), and texts that straddle geographical and cultural boundaries.

Whether in Japanese or English, the basic nomenclature available to identify the object of study proves confusing and contentious when it comes to linking *empire* and *literature*. For example, while its utility has been proposed by some, the designation *imperial literature* (帝国文